

いちひろ

TENRIKYO
ICHIHIRO BRANCH CHURCH

〒635-0812 奈良県北葛城郡広陵町広瀬306

立教 179 年
平成 28 年 7 月 17 日
第 292 号

天理教一広分教会
☎ 0745 (57) 0076

おことば抄

教祖始めた理よりすれば、
迷いは一つも無いものなれど、
あちらも取り混ぜ
こちらも取り混ぜ、
世間のような事に成るから
どうもならん。

(明治33年10月11日)

解説 今日において、おさづけの理を頂戴したあと、仮席で「おかきさげ」をいただくが、それについてのお言葉である。

おやさまが身を隠されてより、さづけの理を本席飯降伊蔵より渡されることになった。もとより「さづけ」の理は、道に勤めた「こうのう」によって授けられるのであるが、そのさづけの理を頂戴したいと、我も俺もと願ってくるようになったので、別席制度が設けられた。明治二十一年夏のことである。

明治三十一年には、別席のお話の統一がはかられる。いうならば、神さまのお話とはいえ、それぞれ先生方によって、話す力点が違ったり、余分な話が混じっていたのであろう、そのところを指示されたのである。

そして、明治三十三年には、仮席のお話についても、すでに九度の別席おいて話を聞いているのだから、「長々話要らん」「神が直き／＼の話に濁り混ぜるやない。濁り混ぜては遙々運んだこうのうあるか、理があるか。」とまで仰せになっている。

さらに「書き下げあろうが／＼。一言二言やない。長く言葉がある。」といわれた。すでにその書き下げの話はあるだろう、ということである。私たちが、今戴いている「おかきさげ」のことである。さらに「十分九度済んだる。書き下げだけの話論してくれ。」「一日仮席に彼是長う伝えたら、何聞いたやら、分からんようになる。初め味よいうた味忘れて了う、」とまでいわれた。

こうしてみてくると、私たちは、頂戴した「お書き下げ」に日々親しみ、心を正していくことが大事である。(み)